

清水正の

## 一里一尺

～自然をたずねて～ ⑰

「莊川物語」

冷温帯気候(ブナ帯)の自然

## 高校時代の友と再会

突然、高校時代（札幌）の友人からメールが届きました。卒業後は私と同じで京都で大学生活を過ごしていました。学生時代は大学も違い、あまり会う事はなかったので実に驚きました。取りあえず

一度会おうじゃないかと言うことになり、待ち合わせをしました。

その足で三条寺町の1928ビル（旧毎日新聞社京都支社）地下のレトロで隠れ家的な雰囲気の店に入りました。思い出話が進む内に彼はぼろりと言いました。「高山の方に別荘があるんだけど、今度一緒に来ないか」。私はすぐさま「是非いかせて欲しい」と返答をしました。

## 莊川高原に遊ぶ

それから幾日かしてメールが入り日程も決まり出かけることになりました。そこは莊川桜で有名な莊川という所で標高一〇〇〇メートルの高原です。七月初旬で下はまだ梅雨が抜けず、生憎の天気です。途中の「ひるがの高原」や「分水嶺公園」に行くことも出来ず、ほ



治郎兵衛の大イチイ

んの僅かの晴れ間にササユリ群生地と「治郎兵衛のイチイ」に向かいました。ササユリはすでに終わっておりましたが、草原の斜面にはタテヤマウツボクサなど色々な草花がありました。ゆっくり見たいなと思いましたが、にわか雨で早々に立ち去りました。イチイの方は立派なもので樹齢二〇〇〇年、幹周り八m、環境省巨木イチイの部門では日本一だとのこと。イチイの木は北海道ではオンコと呼ばれ普通に見られた樹でしたが、これほどまでに大きなもの

は見たこともなく、二人して驚きました。雨降りなのでその日は酒を飲み旧交を温めていました。

## 落葉広葉樹の林に囲まれて

翌日買い出しに高山まで行き、雨中にも拘わらず野外BQを愉しみました。周囲はミズナラやアズキナシ、ホオノキ、コシアブラ、イタヤカエデをはじめとする幾種類ものカエデなどの高木に囲まれ京都周辺の山との違いを感じました。翌朝、別荘の周囲を少し歩きました。ウバユリが実をつけてい



落葉広葉樹の森



ホオノキ



バライチゴ(真ん中に花後)

ました。でも実の数が多く、オオウバユリです。これは中部地方、北海道にかけて自生する植物です。以前秋に信州白馬へ行ったとき、妻がその実殻をドライフラワーにと持って帰ったのを思い出しました。クサイチゴに似た葉を見つけたましたが、ど



ヤマオダマキ



オカトラノオ



ヨツバヒヨドリ



ハリギリの実生

うも少し感じが違います。複葉ですが、そこに付く小葉の数が違う葉の形も細長くすっきりしています。バライチゴでした。図鑑で知っています。冷温帯(ブナ・ミズナラ帯)に分布し、京都では絶滅危惧種になっています。ヤマオダマキ、オカトラノオ、ヨツバヒヨドリなども美しく咲きほこっていました。ハリギリの実生、



ヤブレガサがあらこちらに出ていて、「春来れば山菜として食せるね」など言いつつ時を過ごしていました。京都から飛騨地方にまで来るとずいぶん違った植物が見られ、日本の植物の多様さを知ることが出来ました。

## カラマツ、ブナ、ミスナラ、 カンバの黄色の帯

秋が近づいたとき、紅葉を見に来ないかと誘いのメールが来ました。季節を変えて行きたいと思っていたので、スケジュールを組み替えて誘いを受けました。今回は行きに「分水嶺公園」に寄ることとしました。そこには庄川と長良川の二つの源流があり、庄川は日本海に、長良川は太平洋にと流れていきます。残念ながら沢山の草花などは初冬を迎え、見ることは

出来ませんでした。中央高速の郡上八幡あたりまではまださほどの紅葉ではありませんでしたが、高鷲を越えるあたりから標高も上がり「ひるがの高原」あたりでは見事な黄紅葉になりました。途中カラマツの林が車窓から見えました。

色づいたカラマツは黄金のように輝き見事です。カラマツ(落葉松)は近畿地方では見ることも出来ないもので、なおのこと美しく思えました。まもなく名前の通りきらきらと輝きながら葉が落ちていくのでしよう。私は呑気なことを言っていますが、知り合いの白馬のペンションのオーナーは「カラマツの落ち葉は細かいし沢山の落ち葉で掃除が大変なのよ」とぼやいていたことを思い出しました。ひるがのSAから大日が岳方面はミスナラやブナの褐色帯びた黄葉、



ミスナラ

ダケカンバをはじめとしたカンバの類が真っ黄色になっており、紅葉とは違う美しさです。蛇足ではありますが「国文学作品から見た日本のもみじ観とその成立過程」(西尾理恵)によると「万葉集」では六七例の「黄葉」を始めとして「黄変」「黄」「黄反」「黄色」といった黄色系統のもみじ表記が全部で九八例あり、一方の赤色系表記は「紅葉」が一例、「赤」が二例、「赤葉」が一例で、たった四例しかない。」と記されており、平安朝まではカエデ(もみじ)の紅葉よりも黄葉の方が山のもみじとして一般

的に愛でられていたようです。

## 「いけ」は昔ではない

### 地方名は面白い

いよいよ莊川に入ると、すでに黄紅葉は終わり、落ち葉が舞い散り冬枯れの季節となっていました。別荘に着くと夏とは違い玄関横のデッキには薪が積み上げられていました。そしてデッキから見晴らすと周辺の樹々はすっかり葉を落とし、わずか残った葉は、時折はらはらと風にそよぎ舞い落ちていました。夏来た時にはわからなかったのですが、その中でひときわヤドリギの緑が目立ちました。それもあちこちに。きっと鳥がたくさん種を蒔いていったのででしょう。部屋では久しぶりなので掃除と暖をとるために薪運び、そして薪ストーブを楽しむために、薪ス

トープの窓ガラスを磨きました。慣れた手つきと段取りで、あつという間にストーブに火が入りゆらゆら燃える炎を眺め再会の乾杯です。翌朝、散策がてらカラマツ林にハナイグチというきのこを探しに行きました。ハナイグチは札幌にいたとき、近所の人が良くとってきていました。札幌では、このきのこをラクヨウと呼んでいました。確か中学校の同窓会を札幌で開いたとき、同級生が紙折にラクヨウをきれいに並べて担任の先生に「今年初物のラクヨウです」と言って渡していたことを思い出しました。北海道は東北の人が多く入っているのです、結構きのこ文化が有ったようです。莊川での収穫はありませんでした。少し時期が遅かったのかなと言いつつ部屋に戻りました。翌朝、高山の

朝市にきのこの店が出ているはずだと言って出かけました。すごい賑わいでした。またも残念、一つも出ていませんでした。近くに地の野菜などを売っている店があるからというので寄ってみました。山でとってきた天然のきのこがありました。そこには「いけ」と書いてありました。一緒に行った友人が「これいけですか？」と怪訝な顔で言いました。それからです。どう見てもきのこですから。私は以前二年ほど岐阜で住んでいたことがありますが、「岐阜では方言できのこのことをいけと呼ぶんだ」と言って納得。地方名を聞くのが面白いので、店の人にこのきのこは何ですかと聞くと「もたせ」と返事が返ってきました。それは凶鑑などではクリタケと言われるものだったので、飛騨での地方名



は「もたせ」と呼ぶのかと、新しい知識を一つ得ました。少し古くなっていたので買うことなく、その場を立ち去りました。

## 別荘の周りはきのこがいっぱい くクリタケ・ムキタケく

莊川に帰って別荘向かいの斜面を登ってきのこを探してみました。地面は落ち葉で覆われています。

まさに晩秋。この時期に採れる食べられるきのこは「ナメコ、クリタケ、ヒラタケ、ムラサキシメジ、ムキタケ、エノキタケ」と言うことを頭に描いて探していたら、クリタケが枯れ葉に埋もれて見つかりました。



クリタケ

少し傘が開き胞子も出てい

るよう

す。傘が重なり合った所は胞子が落ちて傘の表面が黒くなっています。かなり大きく、類似の猛毒きのこニガクリタケではないと思いますが、念のためかじってみると苦くない。少しとって今晚のおかずにバター炒めにさせていただきますました。天気予報では今夜から雪の予報、朝を少し心配しながら眠りにつき、目覚めると一面の銀世界。すっかり景色が変わりました。でも四〜五センチほどの積雪で安心。早速帰り支度ですが、ちよつと合間を縫って昨日取り残したクリタケを採りに長靴履いて斜面に登りましたが見当たらず、雪に隠れたかと雪を跳ねますが矢張り見当たらず。あきらめて近くの木を見ると、何と言うことでしよう。根元から頭上より高い所までびっちりきのこが付いていました。下

の方の物を一つとると

黄色に緑が

かった傘の

色、傘の皮

をむくとき

れいにはが

れ、少し毛

が生えています。ムキタケです。

念には念を入れてよくいた物としてあげられる猛毒のツキヨタケで

はないかと調べると、柄の上部に

リングもなく、付け根を裂いても

黒いシミはありません。安心して

レジ袋いっぱい入れて下りました。

いよいよ冬の莊川ともお別れ、京

都の竹田まで送って貰いましたが、

同級生夫婦と別れてからムキタケ

を車においたままに気づきました。

今夜のきのこ鍋は露(汁)と消え

ました。



ムキタケ